『貧困を考えよう』
１・２章について

１章―二人のひろし
２章―日雇労働者の貧困

●二人のひろしの境遇

造田博		田村裕
岡山に生まれる	１９７５	
	１９７９	大阪に生まれる
借金により両親が不在がちになる 授業料が払えず高校を退学		母が癌で亡くなる
両親失踪 以後、職を転々とする 万引き、無賃乗車などを繰り返す	１９９３	家が差し押さえられ、家族が解散 公園で野宿生活をする 近所の人の助けで生活保護を受ける
池袋で無差別殺傷事件を起こす	１９９９	「麒麟」を結成
死刑確定	２００７	「ホームレス中学生」発売、ベストセラーに

●なぜ二人の人生に違いが出たのか

二人とも学生時代に親がいなくなり、貧困によって様々な苦労を強いられている。その点では共通しているが、その後の人生に違いが出たのは、やはり周りとの関係によるであろう。

造田の両親は大金を手にしたことでギャンブルにのめり込み、借金をするようになった。そしてとうとう失踪してしまう。周りからの協力もなかった。殺傷事件を起こしたあとも両親は姿を見せていないという。

一方、田村は優しい母のもとで育つ。小学生のときにその母を亡くすが、父の努力があり学校に通って部活を続けられた。父が失踪してからも、近所の人や兄弟の支援があった。

造田は事件前に公的機関に意味不明な手紙を送りつけたり、周りの人々を「努力しない人間」と見下したりしていた。田村も多くの苦労はあっただろうが、「ホームレス中学生」ではそれ以上に周りへの感謝の気持ちが見える。

貧しい状態になったとき、周りからの協力があるか。周りを信じて前向きにいられるか。「経済的な貧困」だけでなく「関係的な貧困」が大きな問題であると考えられる。

●日雇労働者の集まる場所、釜ヶ崎

　別名「あいりん地区」。大阪市西成区にある。日雇労働者向けの簡易宿泊所、通称「ドヤ」が密集している日本最大の「ドヤ街」。公園での炊き出しなどが頻繁に行われている。
　あいりん総合センターの中にはあいりん労働公共職業安定所があり、日雇いの仕事を求める人々が集まる。また、夕方には無料の簡易宿泊所を求める人々の列ができるという。

参考記事（「探偵ファイル」より）
1　2

●あいりん小中学校

　釜ヶ崎には、貧困などにより不就学状態の子どもが多かった。そのため１９６２年に設立されたのが、教育費・給食費が完全無償のあいりん学園である。翌年にあいりん小中学校となり、１９７３年には独立校舎が完成して大阪市立新今宮小中学校に改称された。入学の条件は戸籍・住民登録がないことと、長期に不就学であることだ。
　あいりん小中学校では生徒への朝食の提供が行われたり、週に１回入浴の時間が設けられたりしていた。３００人以上の卒業生を出したものの、１９８４年には生徒がいなくなり、廃校となった。これは簡易宿泊所のほとんどが単身者用になって家族連れが減ってきたことや、近くの小中学校が住民登録のない子どもを受け入れるようになったことが背景になっているという。

●日雇労働者の貧困

　一日だけ雇われるという形である日雇労働者は、仕事があるときには必要とされるが、ないときには切り捨てられてしまう。
　また企業は正社員に対しては社会保険料など多くの費用を払わなくてはならないため、不況により非正規社員を増やすようになる。しかし非正規社員は雇用保険に加入できない場合が多く、仕事を失うとすぐに貧困に陥ってしまうのである。現在では労働者の３分の１以上が非正規雇用となっている。

●差別的意識によって起こる貧困

　普通のアパートより家賃がかかる場合があるにも関わらず、日雇労働者たちはなぜ日払いのドヤに住むのだろうか。
　理由として挙げられるのは、アパートに入る際に敷金・礼金がかかることである。入居や退去を繰り返せばそれだけお金がかかってしまう。また、保証人がいないためアパートを借りられない場合もある。
　敷金・礼金がゼロで保証人不要のアパートもあるが、そこには様々な問題が隠れている。例えばある会社では、入居者が少しでも家賃を滞納すると鍵を替えたり、荷物を撤去したりしていた。法外な違約金を請求することもあったそうだ。
　普通のアパートであっても、日雇労働者というだけで「家賃が払えなくなるのでは」と判断される場合もある。このように、日雇労働者に対する差別や弱みにつけ込んだビジネスも存在しているため、日払いのドヤ、現在ではネットカフェなどに寝泊まりする人が減らないのだと考えられる。

●貧困者を救うために

　貧しい人たちを支援する「自立生活サポートセンター　もやい」という団体がある。「もやい」ではアパートを借りられない人の連帯保証人になったり、生活保護の申請を手伝ったりしている。また、「関係的な貧困」を解消するため、喫茶店や公民館に人々を集めて会話の機会を与えている。

感想・見解

「貧困を考えよう」を読み、安心して家に住むことができない人や学校に行けない子どもがたくさんいるということを知った。そしてそれは個人の努力だけでは解決できない難しい問題なのだとも知った。

２章の中に「貧困問題が、それこそ半年交替のようにつぎつぎとあらわれはじめた」という部分があるが、他の書籍を見るとその考え方が問題視されていた。１９９０年代は「ホームレス」がメディアに取り上げられたが、それが珍しくなくなると忘れ去られてしまい、また新たに「ネットカフェ難民」という言葉が生まれると今度はそちらが特集される。それも珍しくなくなると今度は「派遣切り」が問題として報道される。このように、貧困に苦しむ人は常に存在しているのに、メディアでは名前や形を少し変えてブーム的に取り上げられ、そのときは問題とされていてもブームが過ぎれば忘れ去られてしまうのである。実際はドヤに住む人もネットカフェで寝泊まりする人も状況はほぼ同じだ。メディアで多く取り上げられて初めて支援をするのではなく、常に意識を持っていれば環境は少し変わるかもしれない。

少し話は違うが、東京の派遣村で人々に就職支援金を支給したところ、それを酒や煙草、ギャンブルなどにあてた人がたくさんいたという記事を見た。釜ヶ崎で生活保護を受けている人にも、同じようなお金の使い方をしている人がいるという。いくらお金が支給されても、本人に働く意志がなければ意味がない。また、家庭環境により、まともなお金の使い方を知らない人や真面目な意識を持たない人もいるのではないかと思う。

ただ単に「経済的な貧困」を解決すればいい訳ではなく、「もやい」が行っているように「関係的な貧困」をなくしていくことが大事なのだと感じた。

参考文献・ホームページ

稲葉剛『ハウジングプア』山吹書店、2009年
稲葉剛、富樫匡孝『貧困のリアル』飛鳥新書、2009年
田村裕『ホームレス中学生』株式会社ワニブックス、2007年
小柳伸顕『新今宮小中学校が廃校になっても』
（http://www.npokama.org/kamamat/bunsitu/genba/syouchu.htm）2011年7月30日閲覧

『貧困を考えよう』１・２章について

http://p.booklog.jp/book/31570

著者：misa
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/catembrace/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/31570

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/31570

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.